

現代の講集団の空間構造についての考察

—三峰講を事例として—

石川 敦子

1. はじめに

1940年代、パウル・フィッケラー、ピエール・ドフォンテーヌにより宗教地理学の意義が主張されてから、この分野の本質決定の努力が本格的に成されるようになった。宗教という狭義の精神文化と地理学において扱われる空間との関わりをどうとらえるかという問題について、共通の認識は未だ確立されていないが、人間の行動の基本的な要素としての宗教に対するアプローチは確実に蓄積されてきた。その性格を大別すれば、地理学の古典的手法である分布論をもとに、宗教の伝播過程の解明をめざすもの、宗教と風土の関わりについて論じるもの、宗教が景観に対しいかなる影響を及ぼすかを探るもの、などをあげることができる。また宗教の可視的側面を対象を限定することから離れて社会集団への宗教の影響を分析し、地域社会における宗教の役割を考察する、社会地理学に接近した研究も多く成されている。

このような状況に、近年は人間主義地理学の影響も加わり、宗教地理学は新しい展開を見せている。実証主義地理学を、その人間を物量として扱う非人間性に対し、批判する立場で台頭した人間主義地理学は、「場所」・「空間」を体験されたもの、意味あるものとして、主体としての人間から見ようとする。その際、空間に意味を付与するものとして宗教が考えられる。ここにおいて宗教地理学には、主体としての人間にとっての宗教空間の解明という課題が提示され、景観の意味づけや構造の把握が宗教儀礼・絵地図の研究を通して行なわれることになった。

主体としての人間から見た宗教景観は、多くエリアードによる聖なる空間と俗なる空間に編成された複合的なものとして把握される。このとらえ方は、地理学における山岳信仰の研究でも近年とり入れられ、修験道における入峰道の分析から象徴的空間を明らかにする試みや、山における各場所の象徴的意味の研究が行なわれるようになってきた。同時に、山岳信仰全体を聖域圏、準聖域

圏、その外側の信仰圏から成る圏構造として把握し、総合的にとらえようとする試みが成された¹⁾。本研究はこの圏構造のうち、第2次信仰圏を構成する講集団の組織・活動について、その現代におけるあり方を、秩父三峰信仰を事例として分析する。

2. 山岳信仰の空間構造と講

一つの山岳に対する信仰の表出形態が形態が地域により異なることから、山岳信仰を空間的に圏構造としてとらえ得ることは、宗教学、民俗学において指摘されてきた²⁾。これらをさらに整理し、各圏相互の機能上の連関を明らかにすることが地理学の課題である、とする主張が成されている³⁾。これによる山岳信仰の空間構造(圏構造)は、次の通りを中心とする圏域を、女人禁制の地点を境として聖域圏、そしてその外側の、里宮および山岳宗教集落が立地する圏域を準聖域圏として把握することができる。さらにその外側には第1次～第3次の信仰圏が設定される。第1次信仰圏は、信仰対象の山岳を直接見ることができ、その山岳の水系流域となる地域である。そこでは年中行事、成人儀礼としての登拝などが行なわれ、地域住民の大部分がそれらの信仰に関わっている。第2次信仰圏は、山岳宗教集落で宿坊を営む御師が巡回し、信仰を流布して参拝講を成立させるに至った地域である。第1次信仰圏と異なり、山岳の自然的恩恵でなく、住民と御師の人為的接触が信仰の契機となる。第3次信仰圏は、各地に支部が形成され、御師の布教活動と無関係に信仰が展開する地域である。

第2次信仰圏における参拝講の成立の意味を考えてみると、それは一地域社会において外部の信仰が受容され定着したことを意味する。桜井(1962)⁴⁾はそれを次のように説明している。閉鎖された自給自足の部落内では、人々の信仰対象は在地の神々(産土神、氏神)に限られていた。それが交通の発達、経済の拡大により、外界との接触

が強まると、御師などの布教者が入って来て他地域にある霊山名社の霊験を伝え、住民のほうも地域外へ信仰の対象を求めるようになる。そこで組織（講）をつくって他地域の信仰中心地へ参拝するようになる。信仰の対象が遠方までひろがると、労力と費用の関係から、代表者を選び各自出し合った講金で参拝させる代参講がつくられる。歴史的には講による参拝が盛んになったのは、民衆の経済力が向上し交通網の発達した江戸時代中期であった⁵⁾。

このように、講による山岳登拝とは地域社会を基盤として成立していたものと考えられることができる。しかし明治以後の交通機関の発達や地域社会の変容は、講の組織・活動のあり方に影響を与えていると思われる。

3. 三峰信仰の概観と講の展開

三峰信仰とは、荒川の上流、奥秩父の谷が切り込んでいところ、現在の埼玉県大滝村に位置する三峰山への信仰・崇敬を言う。信仰の対象となるのは、雲取山、白岩山、妙法ヶ岳、と連なる山々のうち、妙法ヶ岳に連なる一角、標高約1100mに位置する三峰神社である。秩父山地に属するこの一帯は、周囲を1000mから2000mの山が取りまき、かつては江戸からの登拝が4・5日の行程を要する隔絶された霊峰であった。

三峰信仰は山犬信仰を特徴とし、18世紀にはその霊験が「御眷属」という御札を通して流布され関東一円に三峰講が結成された。「御眷属」の霊験は、火防・盗防・農業豊穰と多彩で、山岳の修験者が信仰を広める際に付加されていたものと考えられている。信仰は膝元の埼玉県の他、山づたいにも長野県、山梨県に広まった。現在でもこれらの県の農村部に御眷属を祀る杉の葉でふいた祠が多く見出せる。また配札帳より18世紀の江戸で町結合を基盤とした三峰講が結成されていたことがわかっている⁶⁾。江戸時代の登拝は信州往還、秩父往還を通じて、また秩父盆地から、麓の大輪に至り、五十二丁と言われる急な参道を登るのが普通であった。

4. 現代の三峰講の空間構造

明治以降、交通機関の発達により、三峰登拝行程は大きく変わった。秩父盆地に入る場合、どの道を通っても峠を越さねばならなかったが、明治16年秩父と本庄間の県道が通じた。そして明治34年熊谷一寄居間に敷設された鉄道が、大正2年に秩父まで、大正6年に影森まで延長され、昭和5年に現在の終点である三峰口まで敷かれた。また現在は、池袋一飯能一秩父を西部池袋線が結び、国道140号線が参道の麓、大輪を通過している。そして山頂への行程も、昭和14年の大輪から山頂付近を結ぶ21人乗りロープウェイ架設、昭和39年の71人乗りへの改修、昭和43年の秩父湖をめぐる県道よりわかれる三峰観光道路の敷設、という過程を経て、足を使わない登拝が可能になった。この交通の発達による登拝の簡易化は、三峰講のあり方を大きく変えている。また近代化と都市化により、かつての三峰講の基盤となっていた地域共同体も変質し、講の組織が変わってきている。

このような問題から見た現代の三峰講のあり方について、参拝講と代参講という形式の違いから考える。信仰圏の想定では、距離との関係で浜辺で参拝講が、遠隔地に代参講ができることが仮定される。しかし三峰信仰のように信仰圏が大体関東一円に留まる場合、交通の発達し経済力の向上した現在において距離により参拝講と代参講の立地を考えることはできない。代参形式をとり続けることは講員にとって講という組織の中での信仰が重要であることを示し、少々離れていても参拝講を行なうということは講員の信仰が個人として直接神社へ向かう傾向を示すと言える。すなわち代参講は地域社会における信仰の結びつきの性格を留め、参拝講はそれを越えた結びつきに発展する可能性を持つと考える。このことより、代参講は農村域に参拝講は都市域に多く成立しているという予想が立つ。しかし昭和62年度使用中の講社台帳に記載されている870講社のうち187講社に対して行なったアンケートの結果回答の得られた76講社について参拝講、代参講の分布を見ると、その違いは明確ではなかった(図1)。次に、その成立年代を見る(図2)。これによると代参講の多くが明治・大正時代に成立しているのに比べ、

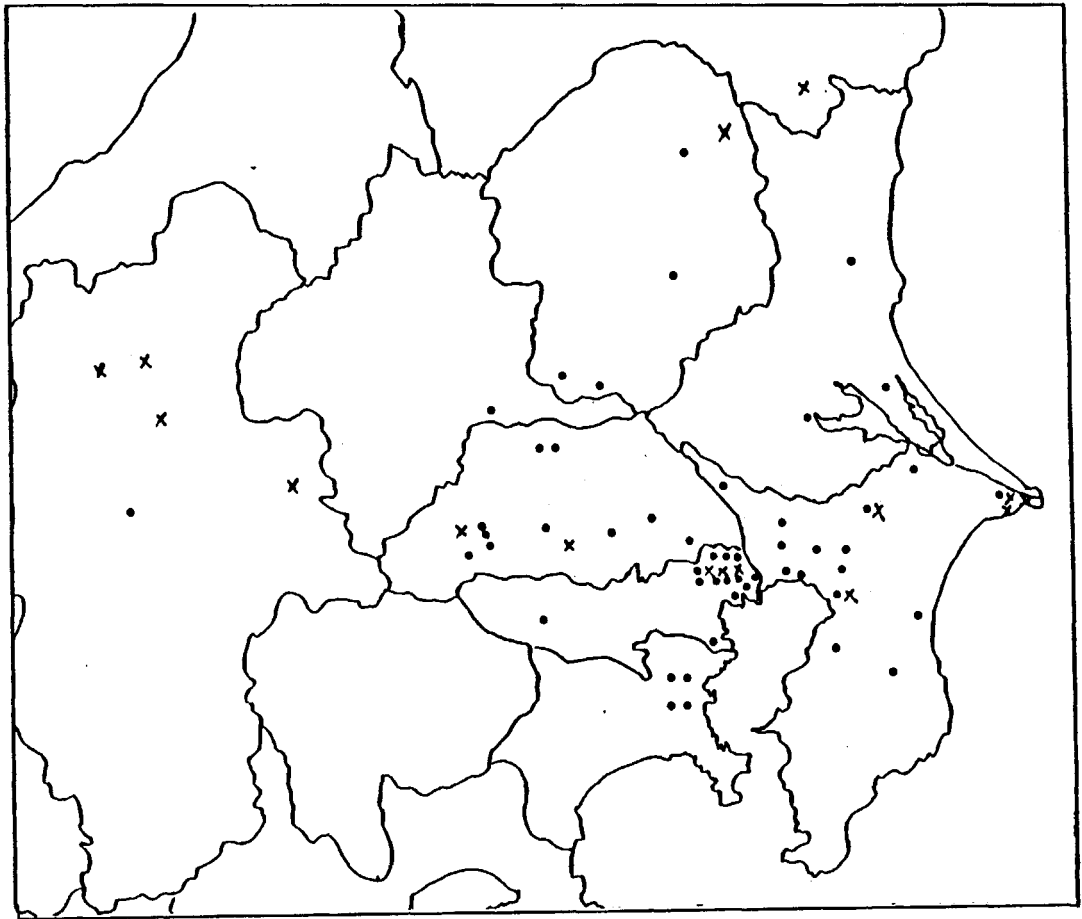


図1 アンケート結果による参拝講・代参講分布図(部分)

●……参拝講 ×……代参講
 他に、静岡県から1、福島県から2、山形県から1、
 宮城県から2、新潟県から2事例の回答が得られた。
 そのすべて参拝講であった。

参拝講は昭和に入ってから数多く成立している。そして参拝講の数の増加と共に分布地域も拡大し、宮城・新潟などにも参拝講が形成されていったことがわかる。またここで見る限りは、代参講→参拝講と形式を変えた講社が多く、参拝講→代参講と変わった講社はない。これより現代の三峰講においては、講員自身の登拝が重視される傾向にあると言える。

次に、他の共同体との関係から見た三類型、

- a. 他の共同体の構成員が自動的に講員となる形で成立している
- b. 講員どうしが、町内会など他の共同体に

よっても結びつく形で成立している

- c. 講員どうしが、三峰講のみによって結びついている

に、アンケートに対する回答より分類した結果はc型がいずれの県においても圧倒的に多かった。講員が他の共同体における強制や無意識の影響を受ける割合が三類型のうち最も少ないc型は、講員の参加動機が最も主体的かつ個人的であると考えられる。そのc型の卓越は、先にあげた参拝講の優勢と矛盾しないと言える。

このように、三峰講は地域社会を超えて主体的・個人的な選択のもとに講員が結びつく傾向にあ

る。c型に分類される講社について、講員居住範囲を見ると(表イ)、各県において市町村区内というものが多く、また大字・丁目・集落などそれ以下の地域内に限定されるものも多い。講員が主体的・個人的に登拝自体を目的として集まる傾向が強い三峰講であるが、登拝の際の効率を下げても遠くから特定の講社に講員が集まることは少ないと言える。これは講員にとって登拝自体が最も大きな意味を持っていることによると考える。

それでは、三峰講における登拝はどのような

性格をもつだろうか。宿泊日数・宿泊地・神社以外の立ち寄り先・使用交通機関を尋ねたアンケート結果より次のことが言える。

- ① 三峰登拝はほとんどがバスによる日帰り、または1泊旅行として行なわれる。
- ② 1泊する場合、関東地方・長野県・静岡県からの登拝には、神社宿坊泊、いわゆる参籠をするものが多い。その中で千葉県からの登拝には他に宿をとる例が比較的多い。
- ③ 他に宿をとる場合、多く栃木県、群馬県、

参 拝 講									代 参 講											
	江戸時代	明治時代	大正時代	昭和1~20	昭和21~30	昭和31~40	昭和41~50	昭和51~60	昭和61~		江戸時代	明治時代	大正時代	昭和1~20	昭和21~30	昭和31~40	昭和41~50	昭和51~60	昭和61~	
埼玉		●		○	○	○	○	○		埼玉	●									
東京	●	○	○	○	○	○	○	○	○	東京	●	●					●			
千葉	●	○	○	○	○	○	○	○	○	千葉	●	●		●						
神奈川		○				○	○	○		神奈川										
茨城			●	○					○	茨城										
栃木		○		○	○	○				栃木					●					
長野						○				長野	●	●	●							
静岡										静岡	●									
福島			○						○	福島							●			
山形				○						山形										
宮城						○				宮城							●			
新潟				○				○		新潟										

図2 各県における参拝講・代参講の成立年代および形式の変化

[アンケート結果より作成]

(○……参拝講 ●……代参講 ●→○はその形式の変化を表わす)

長野県の温泉地が選ばれる。特に伊香保温泉が好まれている。

- ④ 宿泊地の他に立ち寄る場所としては、秩父盆地の秩父神社と三十四か所霊場、長瀬の宝登山神社が圧倒的に多い。

三峰講員の属性は、40代～70代の中高年者が多く、自営業及び無職の人が多く。三峰登拝はこれらの人々にとって、レクリエーションを兼ねた小旅行の意味を持っている。

講員にとっての登拝の意味をより具体的に考察するため、東京都葛飾区を中心とする参拝講である東京丸元講の講員を対象に、アンケートを行った。これによると三峰登拝に対する感想には「すがすがしい」「はげれする」「安心」という

言葉が多く見られ、また三峰の霊験とされる盗防・火防の御利益が重視されている。登拝の目的として、閑静な場所で身心を清め日常生活における危険からの保護を求める態度を見ることができる。これは新興宗教の研究においてしばしば指摘される。現在直面している悩みの解決を第一に求める態度とは性格を異にする。ここでは激しい肉体の疲労や忍耐は登拝行程の必須条件とならない。回答者の多くが登拝行程に対し、「ちょうどよい旅行である」という評価を選択肢より選んでおり、また登拝を続ける理由のうち信仰の次に来るものとして、「よい旅行となるので」という選択肢を選んでいる。すなわち登拝には、比較的楽な行程のもとで日常生活の安定を祈願するという欲求を

	市町村区より狭い範囲 (大字・丁目・集落など)	市 町 村 区	都 道 府 県	都道府県より広い範囲
埼玉	(28)(85)(100)	(16)(37)(80)(100)		
東京	(85)(200)	(25)(38)(50)(50)(60)(100) (130)(130)	(20)(30)(130)	
千葉	(11)(20)(29)(33)(35) (46)(62)(62)(80)(94)(120)	(10)(25)(45)(55)		(60)
神奈川	(30)	(40)(130)		(50)
茨城	(24)(26)			
栃木	(150)	(50)(80)	(185)	
長野	⊗ ⊗ ⊗	(130)		
静岡		(25)		
福島	(30)(65)(120)			
山形			(100)	
宮城		(138)		
新潟		(15)(76)		

表1 講員居住範囲と講員数から見た各県におけるC型講社

(○)……1つの講 数字はその講の講員数 ⊗は不明

[アンケート結果より作成]

核に、快適な旅行の楽しみの意味が持たされている。奥山の閑静な環境にあり、かつ交通至便という条件を備えた三峰神社は、その要求を満たしていると言える。

5. まとめと課題

三峰信仰において第2次信仰圏を構成する講集団は、かつての基盤であった地域社会を越えて、講員各自が自身による登拝を目的として一時的に集まる組織の性質を強めている。そこに現代の講集団の組織の変容を見ることができる。その要因として、交通機関の発達により高齢者でも歩かずに登拝が可能で、しかも奥秩父を背後に控えた森閑の地にある三峰神社が、日常生活の安全を祈願しかつレクリエーションとしての小旅行も兼ねた登拝を行なうという中高年者の要求にかなう条件を満たしていることがあげられる。

本研究においては、アンケート結果を資料として三峰講全体の傾向を述べたが、地域社会の変容

と講集団の質的变化の関係を論じるためには、講を構成する社会集団について、さらに調査が必要である。今回果たせなかったが、次には一地域を対象とした分析を行わなくてはならない。

注・参考文献

- 1)岩鼻通明(1981):観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌,人文地理33-5
岩鼻通明(1983):出羽三山をめぐる山岳宗教集落,地理学評論56-8
- 2)宮田登(1961):山岳信仰と講集団,日本民俗学会報21
- 3)前掲1)参照
- 4)桜井徳太郎(1962):『講集団成立過程の研究』吉川弘文館
- 5)新城常三(1964):『社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房
- 6)前掲2)参照

A Study on the Spatial Structure of the Activities of Koh in the Present Day
—In the Case of Mitsumine Koh—
Atsuko ISHIKAWA